

学生たちと読むギリシア悲劇

金山愛子

はじめに

グローバル化に対応して国連機関や学会等、世界規模で市民性教育の必要性が説かれ、様々な取り組みがなされている。多文化共生社会における市民性教育の必要性も十分認識した上で、ヘイトスピーチに代表される国籍や人種の違いだけでなく、思想・信条の違う人々を差別的に攻撃する風潮が日本でも日常化していることに注目したい。ヘイトスピーチや中傷とまではいなくても、私たちの所属するコミュニティでも、思想や信条の違いを越えてお互いに理解し合い、協働し合おうとする意識や努力が薄れてきてはいないだろうか。内田樹は「弱者」も「被害者」も「正義の人」も社会に対して批判的な言葉遣いをする時に「呪い」の言葉を吐くと言い、そのような「言説が際立ってきたのは、1980年代半ば、ニュー・アカデミズムの切れ味のいい批判的知性が登場してきた頃から」だったとする。この頃から、『知性の冴え』がほとんど『攻撃性』と同義になったと言い、影響力のあるテレビ番組により、「他人の話は聞かない、自分の意見だけを言いつのり、どれほど反証が示されても自説を絶対に撤回しないこと」がディベートであると理解され、「情理を尽くして語る」ということがなくなったと評する（内田、18-25）。内田が指摘した傾向の現れた時代から30年以上経つが、そのような傾向は衰えることなく、社会の分断を生み、差別を助長している。

本共同研究の狙いは、言語教育の分野でいかにして「市民性」形成をめざしていけるか、その可能性を探るものであるが、本稿では言語教育をさらに広げて、言語を介した文学研究での実践例を考察する。筆者は敬和学園大学人文学部英語文化コミュニケーション学科専門科目である「文学研究」（過去に「ドラマ」「フォークロアと神話」として開講）で、『グリークス』というトロイア戦争とその後のアトレウス家の悲劇を扱った物語を取り上げ、ギリシア悲劇が現代の学生に対しても影響力をもっていることを観察してきた。本稿では、ギリシア悲劇の学びが市民性を涵養するためにどのように寄与できるか、市民性形成のどのような面で特に貢献できるかをリベラルアーツ教育の実践を通して論じる。

1. 市民性教育は何をめざすか

市民性教育の定義は広く、統一された定義が定着しているわけではない。市民性教育は本来的には主権者教育であり、2019年12月に設立された日本シティズンシップ教育学会では「参加型民主主義社会を支える市民を育てる教育」（設立趣意書）としている。そ

のため市民性教育は政治学、経済学、教育学、社会学の関心事として語られることが多いが、学際的な広がりを含む概念である。しかし、それゆえに共同研究者である有田が UNESCO の提唱以降の市民性教育の具体化の難しさを本年報でまとめ指摘しているように、市民性教育については暫定的な目標を設定することが必要である（有田、47-49）。ここでは、有田の主張する6つの「力」の育成を支持しつつ、特に他者との対話力の育成に焦点を当てて考えたい。

イギリスの市民性教育の基礎となった政治理論家バーナード・クリックによる「学校における民主主義とシティズンシップの教育」（1998年「クリック・レポート」とも呼ばれる）では、「政治文化の変革を担う活動的な市民（アクティブなシティズン）の育成」を市民性教育の目的として挙げ、そのために「政治的リテラシー」、「社会的・倫理的責任」、「コミュニティへの関心と参加」を育成することを三つのテーマとして提示した（千葉、24-27）。千葉はクリックの「政治」とは「妥協をとまなう対立の調停を旨とする公共的活動である」との言葉を引用し、もっと分かりやすく、政治とは「種々の異なった価値観や考え方が共存する状況において話し合い（意見交換や討議）を通じて吟味し補正し合い、相互に自らの立場を修正して合意形成を探究する行為様式ということ」であると解説する（千葉、24）。

「クリック・レポート」を受けて、ブレア政権下のイギリスで2000年に改訂された新しいナショナル・カリキュラム (Curriculum 2000) における「シティズンシップ」教育の目的を、今谷は以下のとおりまとめている。

ここでは、「シティズンシップ」が、子どもたちに、我々の経済や政治の民主的な制度と価値について教え、異なった国家的・宗教的・民族的アイデンティティーを尊重することを勇気づけることによって、地域的・国家的・国際的レベルでの社会的役割を効果的に果たし、自らの義務と権利を自覚した知性的で思慮深く責任ある市民になることを助けることを目的としていること、それによって彼らの精神的・道徳的・社会的・文化的発達を促し、教室の内と外の両方において、議論や問題解決に積極的に参加できる有為な社会的行為者として行動することができるようになることを期待していることが明確化されているのである。（今谷、5 下線は筆者による）

上述の政治的言説を人文学の学びにおける市民性教育に落とし込んで有田の示す能力を踏まえて考えると、異なる意見に耳を傾け、対話によってお互いに理解し折り合いをつけながら、よりよい意識形成や合意に至る力を身につけることを本稿では市民性教育の目的と考えたい。このような力は上述の「政治的リテラシー」、「社会的・倫理的責任」を養成

し、「コミュニティへの関心と参加」へと導くものとする。その手法として文学の授業における文章表現による「対話力」の育成について報告する。

2. 市民性教育としてのギリシア悲劇

紀元前5世紀民主政アテナイでは、前534年頃から悲劇の上演が行われていた。競演形式をとるようになったのは、前502-501年とされる(川島、13-14)。大ディオニューシア祭という7日間にわたる国家的な宗教的・政治的行事において悲劇の競演が行われていたが、執政官の職務には、悲劇詩人及び上演世話人の選定が含まれた。毎年3人の悲劇詩人が選ばれ、3本のギリシア悲劇と1本のサテュロス劇を各人一日かけて上演し、三日間の競演を行った。アテナイ市民団を構成する10部族を代表する審査員が、最優秀と思われる詩人に投票するが、その中から5票だけが開票され、最も得票の多い詩人と上演世話人が優勝の榮譽を受けた(丹下、296-307)。アイスキュロス(前525-455)、ソポクレス(前496?-406)、エウリピデス(前485?-406)はギリシア悲劇を代表する詩人としてその作品と共に名を残している。

ギリシア悲劇では現代劇と異なり、コロスと言われる合唱隊が大きな役割を占める。ギリシア悲劇の起源は、歌い舞い踊るコロスの中から一人の役者が前に現れて台詞を話したこととされている。コロスの役割について簡単にまとめることはできないが、その歌を通して観客に物語の背景を説明したり、コロスの長が登場人物と対話し、戯曲内で起こっている出来事や登場人物に対して一般市民が感じるであろうような見解を述べたり反応を示したりすることで、登場人物と観客を橋渡しする役割を演じていた。このコロスはアテナイの市民から選ばれ、当時、三段櫂船の漕ぎ手になることと悲劇や喜劇でコロスを演じることがアテナイの一般市民の名誉と考えられていた(久保、4-5, 10)。実際、悲劇詩人のソポクレスも少年俳優としてコロスを演じた経験があった。ギリシア悲劇は職業的な役者だけによって演じられるものではなく、観客であった者が、次の年にはコロスとして演じる側に回る可能性のある市民を巻き込んだものであった。また悲劇詩人は脚本の制作だけでなく、演出にも関わっており、「先生」(ディダスカロス)と呼ばれていた。

詩人が「先生」と呼ばれた根拠は、演技指導や演出の指導者というだけの意味であったのだろうか。筆者は、演劇指導上だけでなく、市民に対する倫理的な教育者としての側面も加わっていたのではないかと推論する。それは、ギリシア悲劇の倫理的な特徴や、市民演じるコロスの歌からも推察される。例えばソポクレスは『オイディプス王』において、父である先王を殺した犯人がオイディプスなのかどうかを判定するために生き証人を呼びにやり、真相を確かめるのを待つ間に歌う第二スタシモンで、もしもオイディプスの犯したような傲慢の罪(ヒュプリス)がまかり通るようであれば、「なぜわたしが奉納の

舞を舞わねばならぬのか」(『オイディプス王』896-897行)とコロスに今この舞台上でコロスとして舞う意義を問わせるメタフィクシオンのな意思表示をさせている。

川島は「彼ら(上演世話人)はこの貢献を通して、演出を担当した詩人(「教師」とともに、合唱隊を構成する市民を、そしてコロスに代表されるアテナイ市民(観客)を、ポリスの新しい精神の体现者たるべく教育する榮譽を担った」と述べる(川島、15)。『トロイアの女たち』(前415年)では敗戦国の女たちの苦悩と悲哀を描くことで、実際に前5世紀のアテナイがペロポネソス戦争で犯した残虐行為を詩人は可視化した。詩人エウリピデスはトロイア戦争に重ねて、アテナイ市民によるメーロス島での暴挙(前416年)を告発していると考えられる。ギリシア悲劇は、神々に翻弄される人間の悲劇を描きながら、人間の有り様を考えさせるものである。アテナイ市民とはアテナイ全人口の10～15%に過ぎない市民階級男性のみであったが(千葉、18)、エウリピデスは特に『トロイアの女たち』で本来声をもたない女たちに声を与えており、市民は悲劇を通して言葉を奪われた者たちの声を聞くことができた。その内容の切実さを考えると、観客である市民そしてコロスとして舞台に立つ名譽を受けた市民を、悲劇詩人は教育していたと考えられる。¹⁾

それではこのようなテキストから、現代の観客である学生たちは何を汲み取ったのか、ギリシア悲劇はどのような市民性育成の可能性を有するのか、実践報告を通して考察する。

3. 『GREEKS』を読む

(1) 授業の目的

ギリシア悲劇は人類にとって根源的かつ普遍的な問いを現代の私たちに対しても発する。宗教観や女性観をはじめ、現代との違いは数多く存在するが、正義とは何か、善悪について、責任ある立場にある者としてどのようにふるまうべきか等をめぐって現代に通じる問いを投げかけ、厳しい選択を迫ってくる。授業では、コメントを書くことを通して、学生に次の5点を求め、彼らが主体的に考え、決断し、また自分と違う意見があることを知り、対話する術を学び取ってほしいと意図した。

- ①正解の見えない難しい問題についても無関心になったり諦めたりせずに、自分の問題として考える。
- ②自分の考えを他の人に伝わるように言語化する。ギリシア悲劇のようなインパクトの強い題材を扱う場合は、自分の発する言葉にも正確さや論理性が求められる。
- ③他者の意見を知り、理解しようとする。
- ④共感した意見や自分とは違った意見に対して、自分の考えを表明する。
- ⑤意見の違いを表明する際は、理由を挙げながら、自分の論拠を分かってもらえるような言葉を使う。相手を頭ごなしに否定したり、切り捨て、傷つけるような言葉は使わない。

⑤についてはローゼンバーグの非暴力コミュニケーションの思想（ローゼンバーグ、2012）を一部参考にした。

（2）実践方法

2019年度の「文学研究B」では『ギリクス』を読んだ。本書は、英国ロイヤル・シェイクスピア劇団の演出家であるジョン・バートンとオックスフォード大学教授でギリシア悲劇を英訳したケネス・カヴァンダーによる、3人の悲劇詩人による9本のギリシア悲劇とホメロスの『イリアス』から構成される10本の作品を現代人に分かりやすい訳で再構成した作品である。テキストと併せて蜷川幸雄演出により舞台化されたDVDを視聴し、観劇の疑似体験をした。

『ギリクス』を読む授業は過去に何回か開講しており、形を変えながらも、学生たちに次のような問いを考えてもらってきた。

①アガメムノンはどうすべきだったのか。

ヘレネをさらったトロイアの王子パリスとトロイアを罰し、ヘレネを奪還するためにトロイア攻撃へと集結したギリシア軍だが、トロイアへ向かう風が吹かないため出航できないでいた。総大将アガメムノンは女神アルテミスの神託「トロイアを陥落させれば、娘のイピゲネイアを生贄にせよ」との言葉を受けて、深く苦悩し逡巡するが、ついに娘を生贄にすることを決断する。しかし、この決断から、ギリシア側にもトロイア側にも、そしてアガメムノンにも多くの不幸が生まれたことは本作品の伝えるところである。この時アガメムノンはギリシア軍の総大将としての立場と父親としての立場で、どちらを優先すべきだったのか。その決断の結果は何をもたらしたのか。

②オレステスはどうすべきだったのか。彼は有罪か無罪か。

アガメムノンの息子オレステスは、父親のトロイア出陣後、故郷アルゴスを離れポーキスで養育された。しかし、トロイア陥落後に凱旋した父アガメムノン王を母であるクリュタイムネストラがその愛人アイギストスと共謀して殺害したと聞く。アポロンの神託を受けて、父の復讐のため密かに故郷に戻り、姉のエレクトラと友人ピュラデスと協力して母とアイギストスを殺し、父の復讐を果たす。この復讐劇は『ギリクス』ではソポクレスの『エレクトラ』を中心にしながらも、母親殺害の場面はアイスキュロスの『コエーポロイ（供養するものたち）』から、復讐後の最後の場面はエウリピデスの『エレクトラ』から一部採用しているため、全体のまとまりを少し欠いた結果となっている。

母を殺害し、復讐を果たしたオレステスであるが、その直後から復讐の女神たち（エリーニュエス）の幻影に怯え狂気に陥る。『ギリクス』の「オレステス」（前408年）はエウ

リピデス作品であるが、ここではアルゴスの民会で死刑を宣告されたオレステスとエレクトラの悲嘆と、彼らによるヘレネ殺しの企図、そして最後に機械仕掛けの神として現れたアポロンによる采配で幕が下りる。アポロンは、民会で死刑を宣告されたオレステスに、アテナイに行き、裁きを受けるように言い渡し、「復讐の女神たちはお前を非難するが／私がお前の責めを引き受け、お前は無罪となるだろう」（242）と言う。この予言は、アイスキュロスの『エウメニデス（恵み深い女神たち）』（前458年）を踏まえて後輩のエウリピデスが創作した箇所である。そこで、授業では『エウメニデス』を読み、実際にアレイオス・パゴスでの裁判の場面を、裁判長である女神アテナ、原告の復讐の女神たち、被告のオレステス、その弁護人のアポロンとして読み合わせをし、受講者全員が陪審員となって、オレステスは有罪か無罪かを投票した。これは、オレステスの物語を自分事として考え、このような判断を求められたときに、自分としてベストの選択をすることを求めるものだった。

このほか、年によって強調点は変わったが、「いったい誰が悪かったと思う」との冒頭の問いにいかに応えるか、「正義と善悪」、「神々について」が頻繁に話題に上った。

（3）学生はどのように考えたか

上記の「①アガ멤ノンはどうすべきだったのか」におけるアガ멤ノンの出した選択についても、「②オレステスはどうすべきだったのか。有罪か無罪か」におけるオレステスの行為についても評価は様々であった。アガ멤ノンがトロイア攻略のために娘イピゲネイアを生贄にするという公の義務を優先することは避けられなかったのか、父親として娘を守るべきではなかったのか、意見は分かれた。その中で、アガ멤ノンに人間らしい道を選んでほしかったとしながらも、どちらか一方の答えを選択しなかった次のコメントに批判が集まった。

私は、アガ멤ノンのように王として守るべきものを守るか、父として守るべきものを守るべきか選択させられた場合、どちらも選ぶことをあきらめます。どちらも大切なものなので、手放したくはないため、全力で他の方法を探し出します。王としての資質を疑われ、父としての威厳を失われて〔失って〕、自分がどちらも後悔する選択ならば、私はどちらも選択しません。そして問題を解決できるように、信頼できる協力者を集め、一人で考えるのではなく、仲間の力を借りて問題の解決に努めます。アガ멤ノンにも、あきらめずに人間らしさを残すために後悔しない道を選んでほしかったと感じました。（2019年）

この意見に対しては、「アガメムノンはすでにそのような解決方法を考えていたはずである」や、「あまりにもユートピア的な意見で、…どちらでもない良い解決方法を探るなんて都合のよいことはできないと思う」等の応答があった。このような批判は的を射ていると言えるが、対話という面では相手を沈黙させてしまうような辛辣さが見受けられた。攻撃性が感じられるような文章については、「非暴力コミュニケーション」の観点から書き方の修正案を出した。次の応答は、同じように先の意見に対して批判的であるが、丁寧に段階を踏んで応答している。

自国の勝利か、娘の命か、という2択の中から選択しなければならないと考えてしまいがちだが、「どちらも選択しない」、「別の手段を探す」といった第3の選択肢について考えることは、物語を俯瞰的に見ていて面白いと感じた。しかし、国を治め、重大な決定を下さなければならないアガメムノンの立場を考えると、前述の2択を選ばざるを得なかったのではないかと思う。アガメムノンの葛藤は、王としての立場と父としての立場で揺れ動いているために起こっているため、後悔のない道を選ぶには、どちらかの立場を貫き通していくしかなかったのではないかと考える。(2019年)

意見の異なる相手に対して頭ごなしに否定することなく、それでもアガメムノンの葛藤の原因を考えて、相手の意見の不足を指摘するという態度が対話的であると評価できる。常に可能であるとは限らないが、物事を常に二者択一的に考えずに第三の道を探ることは、ローゼンバーグの提唱するところであり、リベラルアーツ教育のめざすところでもあると筆者は考える。先の学生の意見は批判を受けたにしても、第三の道はいつ閉ざされるのかという問題提起にもつながるだろう。

戦争という非常事態が人に要求する非人間性や、上に立つ者の苦難を考える次のような意見もあった。

戦争をしているのだ、心を鬼にしろと言うものもいる。国の、多くの人のためには家族にも非情にもなれというものもいる。だが、どちらを選んでも彼は結局後悔をしてしまうと思った。このどちらかの選択を後悔せずに行うには、人の心を捨てきれないと私は考えた。上に立つ者はつねに最善の選択をしなければならない、ということとはとてもつらいことのように思える。(2019年)

このコメントからは「後悔してしまう」のだが、「後悔する」ことが人間らしさを表すと考えていると解釈できる。過ちを犯さずにはいられない人間の本性と、その過ちを悔い

る（後悔する）ことに人間らしさを見るという点で、戦争の残酷さと同時に深い人間理解を示している。ギリシア悲劇が隆盛した時代は、アテナイはペルシア戦争（前 492-480）及びペロポネソス戦争（前 431-404）の時代と重なる。エウリピデスの『アウリスのイピゲネイア』（前 405 年に死後上演）はペロポネソス戦争末期に書かれており、この学生が言う通り、戦争の非人間性を突きつけていたと考えてもおかしくはないだろう。

オレステスの母殺しをめぐってはどうか。オレステスの母殺しは正義と言えるのか否か、オレステスはどうすべきだったのか、そして彼は有罪にすべきか無罪にすべきかを考えた。2016 年度と 2019 年度では、『エウメニデス』に沿って投票するという形で考えてもらった。2016 年度の授業での結果はオレステス有罪が 18 票、無罪が 6 票で有罪が無罪を 3 倍上回った。2019 年度の授業では、オレステス有罪が 11 票、無罪が 10 票で票数が拮抗した。アテナの一票を加えて同数となり、オレステスは無罪となった。これがアテナイでもっとも優れた陪審員（当時の陪審員は執政官経験者から成っており終身制だった）の出した結果と同じであり、皆で興奮し感銘を受けた。2019 年度は、「オレステス」の学びの中で、オレステスは子どもの頃から父の敵討ちを刷り込まれて育てられたという解釈を紹介していた。したがって、2016 年度よりもオレステスの生育環境を考慮した意見が多くなったと思われる。

『エウメニデス』を解説する橋本によれば、作中では陪審員の数が偶数か奇数か不明であるとのことだ（橋本、329-330）。陪審員が偶数であり有罪無罪が同数である場合は、オレステスの問題は人智を越えた問題であると考えている。奇数であれば、陪審員はオレステス有罪が一票上回ったが、アテナの一票により、オレステスは無罪となったということになる。授業では無罪にアテナの一票が加わって、有罪無罪同数となり、オレステスは無罪とした。ただし、我々の授業での票決は、『エウメニデス』における夫殺しと母殺しの罪の重さの比較だけではなく、これまでの『グリークス』の経過を読んだ上での票決となっている。

学生たちの出した票決は、「いかなる欠点もない者たち」（『エウメニデス』475 行）、「わが町の中から、最もすぐれた者たち」（487 行）と女神アテナに言われる陪審員の出した結果と奇しくも同じ結果となった。しかし、誰もが確信を持って投票したとは言えない。皆が程度の差はあれ、ためらい、揺らぎつつ投票したことがコメントから窺える。筆者は、このように、「一方で、…他方で、…」と考える思考法こそがリベラルアーツの思考法であると考えている。したがって、学生たちがそのような考えられたことは収穫であった。自分の考えを絶対化せず、自分が採用しなかった他者の意見にも理を認める態度は、異なる意見に対して開かれた態度を育てるものであろう。

学生はどのように考えて投票したのであろうか。有罪に入れた学生の多くは、オレステ

スが法の裁きを受けることで、この家の負の連鎖という悪循環に一区切りつけられると考えた。どちらの結果になってもおかしくないと考えた学生が複数いた。逡巡しながら決断した者もいれば、確信をもって投票した者もいる。2016年度は無罪よりも有罪が多かった。全体的に、有罪に入れた学生たちは、2019年度の学生ほどためらわずに結論づけたような印象を受けた。

オレステスは有罪だと思う。オレステスが母を殺したのは仕方のないことだったかもしれないが、だからといって殺人が無罪にはならない。父を母に殺された子供がみな母に復讐するわけではなく、殺人よりましな行動をする人もいると考えられるからである。オレステスにははっきりとした母への憎しみと殺意があり、殺す方法もよく計画されたとても残酷な方法だったので、この点は有罪とされる他の殺人犯と変わらない。アポロンは、クリュタイムネストラがアガ멤ノンを殺した残酷さや、母親と子供たちの関係がそれほど特別でないことを説明しているが、陪審員によっては、この説明に賛成しない人もいるのかもしれないので、無罪になるのは難しいと思う。オレステスは母を殺す以外に方法がなかったのは理解できるが、人殺しをしたことについては正義だと開き直すより、罪を背負ってこれから生きていってほしいと思う。(2016年)

次の学生は有罪に票決したものの、悩みながらのぎりぎりの投票だったことがコメントから手にとるように伝わってくる。

オレステスの審判には有罪の票を入れました。『グリークス』で(中略)最も難しいと感じたのは「正義」というものについてです。一体何が正義なのか、正義とは絶対的なものなのか、正義とは正しいものなのか。こういった疑問が何度も何度も浮かびました。私はオレステスを有罪と判断しました。あの時は、考えて考えて最終的には直感で有罪と書きました。自分が何を思ったのか。思い返すと、オレステスのしたことが、罪か正義かというよりかは、もっと単純に、オレステスは死んだほうがよいのか、そうでないのか、で考えていたのだと思います。罪か正義かというところに決着をつけられなかったのは、アポロンの「善と悪はすっきり二つに分けられるものではない」という言葉の通りです。父のアガ멤ノンから始まり、母クリュタイムネストラ、そして二人の子どもに至るまで、「二つに分けられるものではない選択」に車裂きにされてきたのです。アポロンは、オレステスの行いを正しくもあり、正しくないことでもあったと言います。私もそう思ったのです。もはや、オレステスとエレクトラの殺人が善

か悪かということでは判断できませんでした。ですから、私はオレステスが処刑されるべき人なのか、そうでないのか、という視点から考えました。(2019年)

もはや「正義」や「善悪」という価値判断では裁けないことを知り、苦悩した姿が浮き彫りにされている。白黒はつきりつけることはできないが、犯したことの報いを受けるべきであるという一点で、この学生は有罪に入れた。

次に無罪に入れた学生のコメントを紹介する。初めのコメントは、オレステスの生育環境を考えて無罪に投票した。またギリシアの神々に対する懐疑心、不信感が表明され、神々の責任を問うてもいる。

私はオレステスは「無罪」と思います。なぜなら、彼の育った環境は母殺しを肯定するような場所であったと考えたからです。友のピュラデスや老人も計画に反対することなく、姉のエレクトラもそれに追い打ちをかけるように母殺しを肯定し、殺害した。母を殺すことを止める人がいなかった。すなわち間違いというのを学べなかった。生きる道はそれしかないと思い込んでいた。

それに加えてアポロンの神託という大きな導きがあった。あえて言うなら、オレステスは神託を受け母を殺すことにより、王座につくことが英雄になることだと信じていたと思う。あまりにも純粋すぎた若者だったと思う。アポロンを信じてしまうほどあまりにも無垢だった。

だからこそ、母殺しの後にきちんと反省と罪の意識があった。母親のように開きなおることもせずに、女神の幻を見たりして罪の重さを知ることができた。その後は清めを行い裁判まで受けにいった。オレステスはきちんと罪と向き合うことができる若者である。自分が犯したことへの[罪?]の受けとめはできていたため、私は無罪に入れた。

また個人的なものだが、オレステスはトロイア戦争のけじめと一族の呪いを解く人物である。彼が無罪になることで、ギリシャ世界のいざこざが一つ終わり、新しい時代へのポイントになると思う。なので、その人物が有罪（おそらくは死罪になるかも）だと最後まで神に翻弄されすぎていて気の毒と思ってしまった。神さま（いつも正しいとは限らない）と人との関りについて考えさせられる。アポロンは殺人を指示したが、そのことについて罪[罰]をうけるのか?・・・(2019年)

次の学生はオレステスに同情の余地ありとして無罪に入れたが、『エウメニデス』のオレステスには見られない感覚だが、現代的な罪の意識を抱えて苦悩して生きていくオレス

テスの今後の姿を予想する。そのような姿こそ現代の我々の共感を呼ぶものであろう。

授業の投票の数が物語と同数になり、結果オレステスは無罪になったということについては、やはり、今も昔も関係なく、このような状況のオレステスを裁くときは皆、頭を悩ませるのだろう。各々が各々なりに、自身の中にある善悪の規範とオレステスの罪を照らし合わせ、出した答えはきっとどれも正しいのだと思う。結果として、オレステスは無罪にはなったが、ずっと罪を背負って生きていかなければならない。その罪とは彼の中にある「罪悪感」だ。その罪悪感はクリュタイムネストラを殺害し、裁判を終えた後もずっと彼と共にある。オレステスが見る復讐の女神の幻覚はその罪悪感によるものと私は思う。裁判が終わり、無罪になったことで、もう彼の裁判の結果について文句を言う者はいないだろう。しかしオレステスにとって誰にも何も言われないその状況で、罪悪感を抱えて苦悩して生きることこそが彼にとって最大の罰となるだろう。(2019年)

特に2019年度の履修生は、「どちらの結果になってもおかしくない」と考える者が多く、「同じ授業、同じものを見たのに自分と同じ意見の人と真逆の人がいるということ」に驚いた者や投票結果から自分の投票の根拠を考え直し、有罪と思ったが、無罪が適切だと考え直した者もいる。

教員からは同じ授業を受け、同じようにオレステスによる復讐について考えてきたクラスの半数が自分と違う判定を下したことの意味を考えるように注意を喚起した。真剣に考えて出した自分の答えと、クラスの半数は同じように真剣に考えて自分とは正反対の答えを出したのである。自分の正義や価値観を絶対視しないということの意味が体得できた経験だったのではないだろうか。

(4) 『ギリクス』からの学び

学生たちは『ギリクス』という教材から何を学んだのだろうか。

家族との関係に葛藤を抱えてきた学生は、自分の心にあるわだかまを「黒い塊」と称し、登場人物の「許すことができない、許す勇気が持てない弱さ」と同じものが自分の中にあるという気づきを与えられた。自分の中の復讐の女神の存在に気づいたと言える。祖国を滅ぼされ、奴隷となって歩いていくヘカベは「ギリシャのことは許せなくても、トロイアを去り、ギリシャの奴隷になりに行く自分を許すことはできたのではないか」と推察し、その姿から、「弱さを知った者は許すことができる」と教えられたと言い、自分も自分の弱さを知った以上、次は「許すことができるはずである」と希望を語る(2016年)。古典

学者のバーナード・ノックスは「(悲劇は) 家族という枠組みの中で起こる。その親密な単位は…私たちの人格形成の時期から私たちが死ぬまで消しがたい印をつけ、ポジティブな意味でもネガティブな意味でも私たちととどまり、時に重荷となり、時に支えとなって私たちの内にある。家族の憎悪と愛、団結と不和が西洋文学のエネルギー源となっていることは間違いない」と言う (Knox, 20)。私たちの社会の最小単位である家族との和解を希求するような促しを受けたのは、ギリシア悲劇から受けたカタルシスによるものである。それはもがきながら生きる自分自身を含めた人間へのまなざしをも変えるものである。

人間の本質について注目する学生もいる。「人間は物事に意味や秩序を見出し、納得したがる。『ギリクス』の登場人物たちも、神が救ってくれる存在か、無情な存在かはつきりさせたり、何が正しいのかということにも答えを探す。しかし人間は物事に意味、秩序、善悪を振り分けた結果、それに縛られその物事がもつ多面性を見失う」と指摘する (2012年)。人間には明かされない真理を探究し続けずにはいられないのが人間である。悲劇の登場人物がそれでも決して考えることを止めない点で気高いと感じ、「考えれば考えるほど問題が難しくなり、考える人の苦しみが増すというのも真理」としつつ、悲劇詩人は観客に対して、「平和な時も戦争の時も真理を追求させようとしている」と考える学生もいる (2016年)。同時に、真理を探究し、考え続けることの祝福に希望を見出す者もいる。「悲劇には自己に立ち返らせる効果がある。その終わりによって、人は自己の肯定と、神のように、これまでの物事を俯瞰の目で見ることができるようになり、生の輝きや人間の奥深さが一層際立つ」 (2016年) と言い、それを知った今、登場人物を愛おしく感じている。

『エウメニデス』終盤で、裁判結果に怒り狂い、憤懣やる方ない復讐の女神たちへの女神アテナの説得の知恵と忍耐に感銘を受けた学生は、次のように述べる。

私は、その女神たちの激しい怒りをアテーナーが説得により和解に至らせる場面に感銘をうける。アテーナーは、頑なに判決を承服できず拒絶している女神たちに対して、女神たちの無念さを理解しつつ、忍耐をもって粘り強く丁寧の説得する。復讐の女神エリーニュエスとしての使命を劇的に転換させるという提案をしつつ、言い含めながら説いていく。ついにはエリーニュエスからの、ただ甘受するのではなく積極的な納得を得、「復讐の女神」から「恵み深い女神」への大逆転が起こる。それはアテーナイの地に平和をもたらし恵み豊かな国家が訪れることを意味する。復讐の女神を恵み深い女神に変貌させるという大胆なアプローチこそ、アテーナーが「知恵の女神」と呼ばれる所以であろう。(2019年)

アテナ女神の申し入れを復讐の女神たちが受け入れるまで続く対話は実に 130 行以上に及ぶ。忍耐強い説得の結果、アテナは復讐の女神たちを通じてアテナイに平和をもたらす。知恵と勇気、忍耐が平和を創り出す上で不可欠であることを示しており、市民性の形成をめざす者にとっての知恵の女神の説得は手本となるものである。

他方で、物語としての悲劇に着目した学生は、漠然とした哀しみを感じるときに物語に向かうのは、そこにだれかの哀しみを見出し、哀しみに立ち向かっただれかの姿を見出して、「この哀しみはわたしのものだ」と気づくからだと言う。「読者は自分と似た哀しみの形を探し出し、癒され」、「哀しみを抱えながら生きていく悲劇の登場人物たちを見て、『それでも生きていく』ひとの姿に気づかされる」と述べる（2016年）。エウリピデスは詩人としての自らの存在意義を、滅んでいったトロイアの人々の悲しみに沿わせてヘカベに次のように語らせている。

神の手が私たちの城市を捕え、地中深く沈めることがなかったら
私たちは暗闇に消え失せていただろう。私たちの物語は歌われることもなく
後代の人々に歌い継がれることもなく。（『トロイアの女たち』1243-1245）

上述の学生の言葉からは、物語を通じて滅んでいった人々の哀しみが確かに後世の人々によって受け取られていることが明らかである。ヘカベにとって慰めとなる物語は、後世の人間にとって生きる力となりうる。

正解の見えない問いを考え続け、他者の意見に耳を傾け、時に自分の考えを修正してきた学生たちは、他者への共感性を獲得したと言える。学生たちは 2500 年かけて読み継がれ、演じられてきたギリシア悲劇との出会いを通して、それぞれ深く考え、何かを獲得したようである。その多くは「社会的・倫理的責任」の涵養に資するものであろう。アテナイの市民性教育は今日的な意味を失ってはいないと言える。

おわりに

文学素材を使った市民性教育の実践について報告してきた。ギリシア悲劇は「復讐するな」、「赦せ」という教義を語らない。ただ傲り高ぶる人間の行く末、人間的であてにならない神々に翻弄され、苦悶しながらも生きる人間、悪の連鎖を断ち切れなかった人間の嘆きを描く（金山、2-3）。このような根源的で普遍的な問いを投げかける作品は、学生の思考のレベルを深めてくれる。

ギリシア悲劇そのものが持つ教育力が学生からの内発的な意見を引き出したことはこれまで見てきたとおりである。他者と対話しながら学ぶことで得られる思考の深まりや広が

りもある。ギリシア悲劇の発する問いかけに答えることは、社会の一員としての「社会的・倫理的責任」に基づいて考えることになる。また「政治」を千葉が定義するように解釈し、参加型民主主義に貢献する上で必要な力と考えれば、コメントを読み合い、それに応答し合うというプロセスは「政治的リテラシー」につながる小さな歩みとなっていると考えられる。ひいては、これらの力が「コミュニティへの関心と参加」へと学生を促していくのではないか。言い換えれば、「精神的・道徳的・社会的・文化的発達を促し・・・議論や問題解決に積極的に参加できる有為な社会的行為者」を育てるという市民性教育の目的に鑑みると、文学テキストを介した学びも市民性形成に寄与する可能性があると言える。特に、票決が二分したという体験をしたことで、学生たちは自分の考えが「主流」でも「絶対」でもないことを感じたであろう。深く考え、自分とは異なる考えや感性をもつ他者と対話することを恐れない人間を育て、自分の考えを人に伝わるように言語化する術を身につけさせることも市民性教育の有効な手段ではないかと考える。

参考文献

- アイスキュロス『エウメニデス』松平千秋、久保正彰、岡道男編『ギリシア悲劇全集 第1巻』岩波書店、1990年、pp.191-268.
- 有田佳代子「敬和学園大学における『市民性』形成をめざす言語教育の開発と実践：日本語クラスで留学生と『自由』について考えるーベンジャミンの警告ー」敬和学園大学『人文社会科学研究所年報』No.18、2020年、pp.47-58.
- 今谷順重「イギリスで導入された『新しい市民性教育』の理論と方法ー人生設計型カリキュラムの構想ー」『社会科研究』第60号、全国社会科教育学会、2004年、pp.1-10.
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jerasskenkyu/60/0/60_KJ00006794241/_pdf
- 内田樹『呪いの時代』新潮文庫、2014年.
- 金山愛子「ギリシア悲劇と私」『敬和カレッジレポート』第49号、2007年、pp.1-3.
- 川島重成『ギリシア悲劇』講談社学術文庫、1999年.
- 久保正彰「ギリシア悲劇とその時代」松平千秋、久保正彰、岡道男編『ギリシア悲劇全集 別巻』岩波書店、1992年、pp.1-48.
- ソポクレース『オイディプス王』岡道男訳、松平千秋、久保正彰、岡道男編『ギリシア悲劇全集 第3巻』岩波書店、1990年、pp.1-104.
- 丹下和彦「上演形式、劇場、扮装、仮面」松平千秋、久保正彰、岡道男編『ギリシア悲劇全集 別巻』岩波書店、1992年、pp.295-340.
- 橋本隆夫『『エウメニデス』解説』松平千秋、久保正彰、岡道男編『ギリシア悲劇全集 第1巻』岩波書店、1992年、pp.319-335.
- バートン・ジョン、カヴァンダー・ケネス編・英訳『グリークス』吉田美枝訳、劇書房、2000年.
- 眞方忠道、千葉眞編著『はじめての選挙権ー年若き友に』南窓社、2018年.
- ローゼンバーグ、マーシャル・B『NVC：人と人との関係にいのちを吹き込む法』日本経済新聞出版社、2012年.
- Bernard Knox, *Word and Action*, The Johns Hopkins University Press: Baltimore and London, 1979, p.20.

註

1) 演出家の鈴木忠志が富山県の利賀芸術公園で行っている演劇の上演やトークを含んだ演劇祭は、市民性教育の機能を有しているように思われる。

【謝辞】 本研究は敬和学園大学人文社会科学研究所研究補助費によるものです。
コメントの引用をさせていただいた学生、卒業生にこの場を借りてお断りし、御礼申し上げます。